

小松佳代子著

『社会統治と教育ーベンサム教育思想ー』

流通経済大学出版社 2006

「自分が書いた本について語る」ということは難しい。今の自分は、書いた時の自分とは既に違ってしまう。「自著を語る」ということは、「今の自分」の視点から「過去の自分」を論評するということなのか、あるいは、「過去の自分」をもう一度たぐり直して「そのときの自分」を再現することなのか。どちらもうまくできそうにない。前者だとすると、そこかしこに不満はあるが、しかし「今の自分」にもう一度書く力がないことも率直に認めなければならない。後者だとすると、実質的に書いた時から2年くらいの時間が経過していて、記憶が薄れている。というわけで、以下の文章は、「おそらくそのときの私はこういうことを書きたかったのだろう、ということをおの私が語る」という相当に中途半端な「自著を語る」に過ぎないが、ご容赦頂きたい。

本書は、19世紀イギリスにおいて、「功利の原理」にもとづいて法律・政治・経済などあらゆる分野において改革思想を打ち出したジェレミー・ベンサムの教育思想を捉えようとしたものである。なぜベンサムなのか。修士論文でベンサムを学び始めて以降、ずっと近代教育の特質を描き出したいというモチーフがあり、ベンサムの教育思想を明らかにすればそこにたどり着けるのではないか、という漠然とした予感があった。思えば、それは単にベンサムのパノプティコンを近代的権力形式のモデルと見なしたミシェル・フーコーの『監獄の誕生』の見方に引きずられていただけなのだろう。

「読まれざるベンサム」と言われるように、難解なベンサムの著作を、その全体からすればほんの一部であるが読んでみると、法律や選挙制度、救貧システムなどさまざまな改革を通して国家構造そのものをつくり変えようとするベンサムの姿がほの見えてきた。しかもその根幹に教育が位置づいていることが、ベンサムのさまざまな改革構想における教育の位置づけを探るうちにパズルが組み上がるようになってきた。私の筆力のなさでそのおもしろさが十分描ききれていないが、近代市民社会と不即不離の形で成立してきた近代教育の特質、すなわち個人の自由を前提としつつ、それを

社会の統治といかに結びつけていくかという仕組みとして教育はあったのだということが本書の言いたいことのほぼすべてと言っていいのかもしれない。

本書は4章立てで、ゆるやかにベンサムの思想的展開を時系列に従って追うようになっている。第1章はベンサムの立法論である。ベンサムは立法が介入できる領域を限定しようとするのだが、そこに自己統治をなしえない人々の弱さを見出してしまい、その「未成年性」を補うものとして法の概念を拡大していく。それを端的に表しているのが、人々の性向に働きかける「間接的立法論」である。そして、法を実質的に機能させるものとして教育が立法論の根幹に位置づいていることを示した。第2章では、パノプティコン原理にもとづく監獄と救貧施設に関するベンサムの施設経営論を検討した。監視の内面化を強調したフーコーとは違い、「利益と義務を結びつける原理」が最も重要で、個々人の自由な利益追求が施設の秩序維持に結びつく仕組みが明らかになった。この施設経営の論理を社会全体の統治へとつなげていくことが、ベンサムの新たな社会構想の基本的な構図である。第3章はベンサムの学校構想である『クレストメシア』の検討である。ベンサムにとってこの学校構想は、秩序ある国民を形成するための法典編纂の工作模型（ミニアチュア）だったことを明らかにし、社会統治を貫徹させるシステムづくりとしてこの構想を捉え直した。そして第4章では、ベンサムの国民協会批判を検討することで、教育を通じてベンサムが全く新たに作り出そうとしていて社会像の内実を明らかにした。

ベンサムは、近代科学的な合理性にもとづいて、不合理で不明瞭でそれゆえに多くの不正や腐敗を生んでいる法制度や社会制度の改革に乗り出す。その徹底ぶりは、全く新しい社会を最初から作り直すに等しい。その起点にベンサムは教育を据える。すべての子どもを生まれた時からあらかじめ整序された環境において教育することができれば、次の世代には個人と全体の利益が一致する功利の原理に貫かれた新しい社会を構成することができると、ベンサムは考えた。本来矛盾を含んだ個人の自由と社会の統治とを結びつける近代教育が、当然矛盾を含まざるを得ないことがベンサムの思想を通じて明確になった。もし本書が、少しでも教育学に寄与することができるとしたら、この点においてのみではないか、と考えている。